私のアメリカ体験記

――現代アメリカにみる親子の世相――

進藤君枝

アメリカ……　「病める大国」アメリカ社会は何かが変ろうとしている。変動・苦悩するアメリカの様子は、いろいろとマスコミでも取り上げられている。そのような時に、私は北米の小さな田舎町で一年間生活する機会を得ることができた。アメリカを知ろうとしても、アメリカは広大であり、地域や生活する社会環境においてアメリカのとらえ方は、全く異なってくる。ここではささやかな私の経験ではあるが私のアメリカ生活を通して感じた驚き又疑問などを綴ってみたい。

《私のすごしたレディスミスの町》

ミネアポリスから車で三時間半、シカゴから車で七時間の所に位置している、一年の半分は雪にうもれ雪解けと同時に美しい草花が花開く森と湖にかこまれた人

口二〇〇〇人の美しい町である。私はその町にある学生数四〇〇人弱の大学に二学期間籍を置き寮生活をアメリカの若者達とすごした。

学生生活を通して感じたこと

マウント・シナリオカレッジはプライベートな文科系の大学である。その中の幼児教育専攻のコースを私は受講することになった。

このコースは、多くて十五名、少ない時は私を含めて二、三人の学生で講義がもたれた。主任教授 Dr. ジャナシュは、日本で一年間の生活経験をし、日本文化・又日本の教育に大変興味をもっていた。授業の中で、アメリカの母親と日本の母親との相違を学生に語ることがよくあった。その中には、日本の母親の姿をアメリカ女性の目でとらえ、とかく私達が古い思考として現代を生きている若い母親からは、切りすてられている部分に注目があてられていることが多くみられた。Dr. ジャナシュは、毎回講義をはじめる前には必ず学生一人ひとりに声をかけ、学生の様子を問うことがあった。Dr. ジャナシュは、最近の学生達の生活環境の急激な変化に驚きの目をもち、その原因は何であるかをさぐろうとしていた。

あるクラスの十五名の女子学生の中には、十二名の子供を持つ母親がいた。そのうち九名の学生は、現在子供の父親と生活していない母親であった。この学生達の年令は若く、多くは二十才以前に母親になったものが多くみられた。私の親しくしていたアニタも、二十五才で七才の女児を持ちながら勉強を続けていた。娘の父親とは五年前に離婚したとのことである。彼女は学校を卒業したら自分の生まれた南部の町に戻り、プライベートのデーケアーセンター（託児所）をつくるのが夢であった。

年令のいった小柄のキャッシーは、中学生の女児を育てながら学校に通っていた。三年前に離婚をし男児を父親に渡し、自分は娘と一緒に生活していた。心理学を専攻しているキャッシーは、カウンセラーになることを目的として勉強をしている優秀な学生であった。娘はハイスクールを終えたあと、夜の講義を受ける母親を待った

め、一緒にキャフテリアで簡単な夕食をとっている母娘を私はよくみかけた。

アニタやキャッシーのように、子供を一人で育てながらなんとか卒業の資格をとろうと一生懸命勉強している母親達がいる。しかしその反面同じような型で子供を持ちながら、日中は子供をデーケアーセンターに預け、卒業の目的もなくただ学生という名のもとで学生生活を楽しんでいるかのようにおもえる母親もみられた。アメリカ入りをした当初、彼女達の余りにも自由な生活様式をみていた時、いったい彼女達はどこから生活の糧を得ているのか疑問を感じた。彼女達は、政府から与えられるフードスタンプ（低所得者等にあたえられる食料購入券）等の政府からの援助を受けていることを知った。

Dr. ジャナシュは、この二、三年幼児教育を専攻する学生の中にも多くの離婚経験者が増えている傾向にあると語っていた。子供を育てることにより幼児教育のむずかしさを知り、学校に戻り勉強をしようとする学生もみられるがその反面学生の中にも子供をもってはいるが母親としての自覚が薄い若い母親達が多いようにおもえると嘆いていた。

又私のとった他の夜のクラスには、キムというブロンドの髪の美しい学生がいた。彼女の両親は何年前かに離婚をし、両親はそれぞれ再婚をし兄弟姉妹はそれぞれ別々に生活していた。彼女は一人暮しの田舎の生活にも疲れ次の学期からは大きな都会の大学へ移ろうとしていた。特にDr. ジャナシュは、彼女を支えることのできる友人、家族がいないためなんとか彼女の相談相手となり彼女が希望をもってすすめる道を捜そうとしていた。

Dr. ジャナシュは「幼児教育の講義をすることも私にとって大切な仕事です。しかし子供を育てながら一人で生きている女性、キムのように戻る家族のない学生それぞれが多くの問題をかかえて生きているのです。今の私には、学生のためにも、その子供のためにも学生の持つ問題に耳をかたむけて一緒に解決の方向をみい出してあげることも私の大切な仕事のような気がします」と語っていた。

アメリカの学生生活の中で、私の身近な友人・知人の中に余りにも多くの離婚経験者がいるのには驚かされた。彼女達の口からはなんのためらいもなく「最初の夫・今の夫」という言葉が会話の中にされていた。それと同様子供の口からも「前のパパと今のパパ」という言葉も耳にした。友人や知人の一人一人はいろいろな理由で結婚生活に終止符を打ち子供と二人の生活を選んだことは納得できる。しかし子供が幼ない時両親の離婚を経験しその後どのようなかたちで幼児の時をすごしているのか私は今まで幼児教育の現場で仕事をしていただけに関心があった。

現在、生まれる全米の子供の四十五パーセントは成人になる前に親の離婚を経験するといわれている。Dr. ジャナシュは、このように急激に変化しているアメリカの子供をとりまく家庭環境の中で子供達の教育はどうあらねばならないか？「幼児教育の土台は家庭教育にある」という彼女の持論の家庭そのものが失なわれている時、どう今後考えていかなくてはならないかを問いつつある時代であるとのべていた。

小さな町の幼児教育施設

- ○デーケアーセンター（託児所）
- ○公立の幼稚園　二園
- ○私立の幼稚園　一園
- ○ヘッドスタート幼稚園　一園
- ○プライベートナースリー　数園

私は前期週一回デーケアーセンターで観察実習を後期は公立・私立の幼稚園で実習をする機会を得ることができた。

●幼稚園を見学して

午前組と午後組とわかれている。スクールバスにのせられた午前組の園児は九時ごろに園に到着し十一時半まで保育を受ける。カリキュラムは指定されたワークブックを使用しての読み書きが主体である。ここ十年来幼稚

園において知的教育が要求されるようになり最近ではその成果の報告を義務づけられてきているとのことである。担任のミセス・ビクターは、幼児期の遊びの重要性・生活面の指導等は理想としてわかっていても実際面では子供達にさせなくてはならないことがたくさんありなかなか実現できない。アメリカの幼稚園児の年令は、日本でいう年長児の九月からの子供たちである。幼稚園入園前の子供はデーケアーセンターやナースリースクールにいっている。幼稚園の子供達は全般的にあかるくのびのびしてはいるが、日本の平均的な同年令の子供達に比べて身近の自立にほとんど関心のない子供が多いように私には思えた。又現場での経験の長いミセス・ビクターは近年子供達の家庭でのしつけがほとんどされておらず若い母親達の中には、家庭での教育など全く無関心の母親が多くその指導に苦労していると語っていた。

●デーケアーセンター

幼稚園が終り、母親が学生であったり、働いている子供は直接スクールバスでデーケアーセンターに送られる。このセンターは費用は政府からの援助でほとんど無料に近く午前七時から午後五時まで開かれている。定期的につれてこられる子供や母親が外出したりする際等も自由に預けることができる。私が滞在していた時期に、カーター大統領からレーガン大統領に政権が移り、福祉の見直しがなされていた。その為にデーケアーセンターの援助の縮少問題が起り母親達の会合が数回持たれていた。

●子供の虐待

はじめての講義の際、Dr. ジャナシュから、「日本の子供の虐待の現状について説明しなさい」との質問を受けた。はじめ私は説明の意図が理解できなかった。私は現在の日本で親が激しく子供を虐待するようなことがあったら新聞記事になりかねないというような意味の答をした。Dr. ジャナシュはこのことや自分の体験を通して、日本社会では子供は大切に扱われ、かえって親の過保護

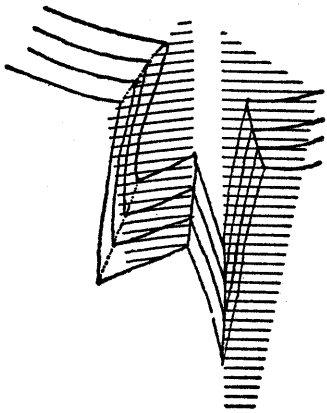
からくることの問題があることを学生に伝えた。それに比べアメリカ社会では、親による子供の虐待が頻繁に行なわれ大きな社会問題になっていることも授業でとりあげた。自らをコントロールすることのできなくなった親が自分の子供を傷つけることによりなんらかの満足を得ている。私も実習した園でいつも体に生傷のたえない女児をみかけた。不思議におもい教師に質問した所、父親によって傷つけられたものであった。この女児の父親も母親も再婚者同志であり、それぞれ二人の子供をつれての再婚であった。父親の連れた多少知能の低いこの女児が父親から虐待される対象になっていたようである。この町の警察もこの父親の例ばかりではなく、近所の人々の通報による子供の虐待、又妻に対する虐待の問題でパトカーが出動することがよくあるようである。

帰国して思うこと

一年間の生活をふり返ってみて一番の驚きはアメリカの家庭がこわされているという現実を私の身のまわりの友人・知人の生活を通してじかに感じたことである。私にとっては家庭とは父・母・兄弟姉妹にかこまれた温かい社会生活を送る為の一番小さな単位だと思っている。その家庭の中ではぐくまれた幼児がはじめての社会生活を同年令の子供とする場が幼児教育施設であると思っている。幼児教育施設でいかによい方法で教育を行なったとしても、教育施設で行なわれる教育のみでは決して幼児は豊かに成長しないのではないか？　アメリカは良い面でも悪い面でも個人主義が発達している。親達の中にも多くは子供よりもまず自分の生活が第一であるという考え方が一般的であるように思える。私はある講義の中でアメリカの今日のトピックスをいくつか扱った短文を読んだ。アメリカの家族について書かれたものである。

ジョン（十五才）とメアリー（十才）の両親は意見があわずいつも争いをおこしていた。その為に家庭内はいつも暗く子供達にとっても両親にとっても楽しいものではなかった。両親が話しあいをしその結果それぞれ別れて暮らすことに決定した。ジョンもメアリーも以前のよ

うに家族が一緒に暮すことを希望したがそれは無理なことであった。しかし両親がそれぞれ別々の道を歩みはじめたら両親の顔が生き生きとしてきた。それを見て子供達は私達子供のために、両親の歩む道を決して束縛してはいけないのだ。父にも母にもそれぞれの人生の歩む道があるのだから……。

私はこれを読んだ時あらためて日本とアメリカの親子間の違いを感じさせられた。日本社会も戦後の自由な教育を受けた若者達が親となる年代にきている。アメリカのように極端ではないが年々離婚率は増加しているようである。又女性の自立が叫ばれ、かつてのように家庭を守るのは主婦の役割という考え方に変化がきている。女性が自立する為には、子育てはどうあるべきかが問われる時代である。しかし私は、アメリカの家庭がこわされその犠牲となっている子供達の姿をみた時、次の時代を背負う子供の教育の場・家庭の大切さ、子育ての重要性をあらためて痛感させられた。

近年、女性の寿命ものび、一生の間に子育てについやす時間は、ほんのわずかなようにおもえる。その期間じっくり母親として子供とつきあってすごすことは、母親自身にも子供の為にも価値あることではないか？　女性の自立が叫ばれ目が社会にむけられている今、母親達に次の時代をになう子供達を育ててゆく大切さ又その喜びを私は現場を通して今後母親とともに考えてゆきたいと思っている。